国際比較図書館学による図書館情報学教育研究の動向

生涯学習基盤経営コース　宮　原　志津子

Current Trends of the Study of LIS Education in the International Comparative Librarianship

Shizuko MIYAHARA

This article aims to examine the definition and history of the International Comparative Librarianship (ICL). The ICL has been developed since the 1960's supported by the library assistance of US for the developing countries. In the 1960's, American library consultants published their articles and books, referring to their work experiences in Southeast Asian countries. They are the first ICL studies in the library and information science (LIS) field. Instead of Americans, some Asian students started the ICL study and earned Ph. D of US graduate schools in the 1970's. At present, many Asian scholars have been contributing to the development of ICL study, particularly at the field of international cooperation of LIS education.

目　　次

1．はじめに
　A　本研究の目的と問題意識
　B　東南アジアの LIS 研究の状況
2．比較図書館学とはなにか
　A　国際比較図書館学の誕生と発展
　B　国際比較図書館学の定義
　C　比較の方法論
　D　比較研究の類型
　E　日本における比較図書館学研究
3．比較による東南アジア地域の LIS 教育研究の動向
　A　欧米コンサルタントによる途上国の図書館紹介
　B　留学生による研究
　C　現地の図書館員による研究
　D　現地の研究者による研究
4．まとめ

1．はじめに

A　本研究の目的と問題意識

近年の図書館情報専門職の国境を越えた移動や，図書館情報学（以下，Library and Information Science : LIS）教育の国際的な取り組み，図書館サービスの国際化など，グローバル化の波は LIS 領域にもいやおうなしに押し寄せている。たとえばヨーロッパでは，高等教育改革に端を発する，欧州域内の高等教育機関における LIS 教育の単位互換や，LIS 専門職資格の相互認証制度の確立に向けた取り組みが進んでいる。アジア太平洋地域においても，高等教育の高まりや図書館の急増により，LIS 教育は再編・拡大が続いている。ヨーロッパの高等教育改革に影響され，域内での LIS 教育の単位互換や専門職資格の相互認証制度の確立に向けた提案がなされるなど，LIS 教育の国際協力に向けた動きも活発化している。今後はより一層，LIS 教育に対するグローバルな視点や制度設計が求められ，同時に研究の必要性も高まっていくことが推察される。

このような研究を行う上で有意義なのが，国際比較研究である。喜多村は「国際化」が叫ばれ，「グローバリゼーション」の進行する現代は，教育制度もまた世界とのつながりを深め，共通の問題や悩みに直面しつつあるので，「歴史」と「比較」はますます重要な研究の視座と方法を示唆するものとなる[1)]と，比較研究の重要性を指摘している。

ある国の図書館サービス・LIS 教育の変遷や 2 カ国以上の図書館活動を比較する研究などは，図書館情報学領域では「比較図書館学」（Comparative Librarianship），あるいは「国際比較図書館学」（International and Comparative Librarianship）として，アメリカを中心に発展してきた。日本では海外を対象とした研究は，アメリカなどの欧米諸国が大半を占めている。一方でアジア太平洋地域に関しては，中国や韓国出身の留学生による出身国を対象とした研究も散見されるが，東アジア以外の国や地域の図書館活動や LIS 教育に関する研究は限られている。さらに 2 つ以上の国や地域，異なる文化圏をまたいでのクロスナショナルな

国際比較研究は非常に少ない。

先に述べたLIS教育のグローバル化の波に，日本の図書館界はいささか乗り遅れているのが現状である。今後，アジア太平洋地域ではLIS教育の制度化が進み，各国間での協力が増すことが推測されるが，域内におけるLIS教育をめぐるこれらのダイナミズムを理解することは，アジア太平洋地域の一員である日本にとって急務である。そこで本稿では，東南アジア地域を対象とした，国際比較によるLIS教育研究の研究動向について考察する。

B　東南アジアのLIS研究の状況

今日に至るまで，東南アジアのLISに関する本や論文は，大学などの教育研究機関に属する研究者ではなく，図書館現場で働く実務家によるものが多い。東南アジア地域のLIS教育機関は，研究者よりも実務家を養成することに重きを置く傾向が強いため，LISを専門とする研究者が東南アジア域内全体で非常に少ないことがその背景にある。

研究者が少ないことから，東南アジア域内で発刊されている英語で書かれたLIS専門ジャーナルも限られている。たとえばフィリピン大学図書館情報学部発行の *Journal of Philippine Librarianship*，マレーシアのマラヤ大学コンピュータ科学情報技術学部発行の *Malaysian Journal of Library & Information Science*，シンガポール図書館協会発行の *Singapore Journal of Library & Information Management* など，ごくわずかである。

近年では欧米系のジャーナルへの投稿や，国際会議で発表する東南アジア出身の研究者は増えているので，域内でのLIS研究が停滞しているわけではない。ただ国際的に活躍することのできる研究者は限られており，研究成果を学術的に発表する機会も東南アジアの中では限られていること，そして英語での研究論文や発表は少ないことから，東南アジアで出されたLIS研究の成果を国際的に共有することは難しい。

学術研究が十分ではない中，東南アジア地域におけるLIS教育の状況を知る上での重要な資料が，UNESCOなどの国際機関の調査報告書や，IFLAなどの国際会議に提出されたペーパーである。本稿では，これら国際会議の議事録や，東南アジアのLIS教育に関する博士論文等も含めながら，東南アジアのLIS教育研究の動向について整理したい。

2．比較図書館学とはなにか

現在，比較図書館学のプログラムは，アメリカで11プログラムが開講されている他，カナダ，ドミニカ，台湾，サウジアラビア，ポーランド，ガーナでも，「国際比較図書館学」などの科目名で，海外の図書館や，国際的な図書館協力などについて学ぶ授業が行われている[2)]。しかし日本の図書館司書課程では，国際比較図書館学に類似する科目は文部科学省が定めるカリキュラムに入っておらず，比較図書館学の研究も少ない。そこで最初に，比較図書館学の歴史や定義，方法論などついて整理する。

A　国際比較図書館学の誕生と発展

1869年のEdwardsによる *Free Town Libraries*[3)]が，国際比較図書館学研究の初期の著作と言われている[4)]。イギリスとアメリカの公共図書館の比較を中心に，ヨーロッパの公共図書館にも言及しており，2010年になって復刊されるなど，後世の図書館研究に強い影響を与えた。その後1939年には，ノルウェーの図書館長Munteにより，アメリカとヨーロッパの図書館学を比較した *American Librarianship from a European Angle*[5)]が出版された。

国際比較図書館学は当初，欧米諸国の図書館比較を中心に行われていたが，第二次世界大戦以降，アジアなどの非欧米諸国の比較も含め，研究は本格的に進展していく。その背景には，アメリカによる同盟国や独立まもない新興国への教育援助や文化外交が盛んになり，それらの一環として図書館援助も積極的に行われるようになったことがあげられる。東西冷戦が深刻化した1950年代から1960年代にかけて，日本や韓国などをはじめアジアやアフリカ諸国の新興独立国に対し，アメリカをはじめ欧米の国家機関や民間財団より多くの本が寄贈され，現地に図書館が建てられた。図書館にはアメリカ文化やアメリカ型民主主義を海外に紹介するという，重要な役割が課せられていたのである。またアメリカ図書館協会（ALA）は，多くのライブラリアンや図書館コンサルタントを派遣し，現地での図書館運営の指導や，図書館専門職の養成にあたった[6)]。

アメリカ人コンサルタントやライブラリアンたちは帰国後，現地での経験をもとにした著作を著し，それらが戦後の国際比較図書館学の発展をもたらした。コンサルタントによって書かれた最初の本は，Asheimによる *Librarianship in the Developing Countries*[7)]であ

る。Asheim は1962年から1966年まで ALA の国際関係事務局（International Relations Office）のディレクターを務めるかたわら，新興・途上国の図書館を数多く視察した。訪問先の途上国とアメリカとの図書館事情の差異に大きなショックを受けたことが，本著を記すきっかけになったという。比較図書館学はこのように，先進国と途上国の図書館事情の大きなギャップを背景として発展した。なお「比較図書館学」の用語が最初に用いられたのは，1954年に *Australian Library Journal* に掲載された Dane の論文[8]と言われている[9]。

その後比較の方法論の検討の進展や，アメリカへの留学生が母国の図書館研究や国際比較の学位論文を書くようにもなり，国際比較図書館学研究は盛んになっていった。たとえば *Library Science Abstracts* に掲載された国際比較図書館研究の論文は，1961年から65年までの４年間で46編であったが，1972年度一年間で68編の論文が発表されている[10]。

1970年代に入ると，アメリカによる図書館援助はアジアだけでなく，アフリカや中東などさらに広範囲に及んだことで，多くの国際比較研究が発表された。また Bereday などの比較教育社会学の影響を受けた Danton[11]，Coblans[12]，Foskett[13]，Harvey[14]，Simsova[15] らが方法論の再検討を行い，国際比較図書学は発展期を迎える。比較教育学がたどったように，比較図書館学も「旅行見聞記」から「社会科学的説明」へと変化していったのである[16]。

1970年代半ば以降，アジアなどの経済発展や，東西冷戦の終焉により，アメリカの図書館援助は縮小されていった。この頃になると，国際比較図書館学の初期に見られたような，欧米のコンサルタントによる新興・途上国の報告はなくなり，アメリカの図書館学校で学ぶアジア出身の留学生による比較研究が散見されるようになってきた。今日では教育の国際化の進展もあり，アジアやアフリカなど非欧米諸国の研究者による国際比較を行った研究や調査報告は，専門学術雑誌や国際会議の場で多く見られるようになっている。

B　国際比較図書館学の定義

図書館情報学研究における比較研究は，「比較図書館学」や「国際比較図書館学」と呼ばれている他，類似の用語に「国際図書館学」（International Librarianship）もある。あいまいなまま使用されていることも多いので，ここで改めて整理しておきたい。

１．比較図書館学

第二次世界大戦後に比較研究が本格化した当初は，「比較図書館学」の用語のみが用いられていた。Shores は，「異なる国の図書館の理論と実践の比較研究」[17]と定義づけた。コロンビア大学で最初に比較図書館学を教えた Collings は，*Encyclopedia of Library and Information Science* において，「図書館発展における原因結果の究明と図書館問題の理解に対する重要なアプローチ」であり，「異なる環境下にある国々で発生する図書館の発達，実務，あるいは諸問題を，関連する歴史的，地理的，政治的，経済的，社会的，文化的，そしてその他の背景をなす決定諸要因のコンテクストの中で体系的に分析すること」としている[18]。

このように比較図書館学とは，「図書館の発展の原因と結果を探求し，図書館の問題点を理解するためのアプローチ」[19]である。基本的には，２つ以上の異なる空間（国）の図書館等を比較して同質性と異質性を明らかにし，その差異をもたらした歴史的，地理的，政治的，経済的，社会的，文化的な要因を検討することである。

これらの定義では，異なる空間（大半は国）を比較することを前提としている。それでは1850年，1900年，1950年におけるドイツの LIS 教育など，同じ国の異なる時間軸を比較する「時間比較」は比較研究の対象に含まれないのだろうか。比較教育学研究者のヒルカーは「比較研究というのは，二つまたはそれ以上の対象が提示されるか，相似した種類のものが並置されるか，対置された場合にはじめて成立するもの」であり，「対象の複数性は空間的あるいは時間的相違によって与えられる」との立場に立っている[20]。つまり空間的，時間的比較は両方とも可能であり，時間による比較を比較教育学の対象に含めている。一方で図書館情報学研究者の Danton は，一地域における時間的比較も比較研究の一部として考えることはできるが，図書館史学の領域にあたるので，一つの社会の垂直的年代史的研究は歴史学者の領域にすべきであるとし，時間比較は比較図書館学に含めるべきではないとの見解を出している[21]。

このように研究者によって違いがあるが，本稿ではヒルカーが唱えるように，空間及び時間による両方の比較が可能であり，一国を対象にした時間軸による比較研究も比較図書館学に含まれるとの立場をとることとする。

2．国際図書館学

空間だけでなく時間による比較も比較研究に含めることで，比較研究の対象はかなり広範囲になった。また欧米諸国から途上国への図書館援助や，UNSCO など国際機関による国際的な図書館活動も世界的に増えたことで，国際協力活動に関する研究も行われるようになってきた。そこで Parker は「世界各地の図書館，ドキュメンテーション，図書館学，図書館専門職を促進し，開発し，維持し，評価するために，政府や非政府組織，多国籍のグループや個人で行われる活動」として「国際図書館学」を提唱した[22]。Simsova は比較図書館学と国際図書館学の違いについて，「学問として体系的研究方法を用いて行われた場合には比較図書館学と呼び，そうでない場合には国際図書館学と呼ぶべきである」と考えており，たとえば海外の図書館調査の場合，調査目的が国際理解を促進にあれば国際図書館学の活動になり，数カ国における或る問題の解決法を比較する目的での調査であれば，比較図書館学と呼ぶべきとしている[23]。

3．国際比較図書館学

また比較図書館学において，異なる国や地域での比較をより強調するために，「国際比較図書館学」の呼称が提唱された。Kawatra は，比較図書館学と国際比較図書館学は２つの異なった領域であり，比較図書館学は，主に「図書館発展の原因と結果の研究」であるのに対し，国際図書館学は，「国際理解と協力」のためのアプローチ」であると区分することを提唱した[24]。しかし両者の間には違いがほとんどないとの意見もあるなど[25]，「比較図書館学」と「国際比較図書館学」の境界はあいまいである。

本稿では，Yan の「比較図書館学は，国際比較図書館学を含めた定義」[26]との立場を採用し，異なる２つ以上の空間（国家や地域など）の比較を行う研究は「国際比較図書館学」とし，地域研究や国別研究も含め，図書館情報学における包括的な比較研究を指すときは，「比較図書館学」を用いることとする。

C　比較の方法論

比較図書館学は，「図書館の発展の原因と結果を探求や，図書館の問題点を理解するためのアプローチ」[27]であり，背景にある歴史的，地理的，政治的，経済的，社会的，文化的な要因を検討することが欠かせない。Collings[28]や Simsova[29]は1960年代に発展した比較教育学の方法論に影響を受けて，比較研究により科学的な手法を取り入れる方法論を提唱している。

Danton は，Bereday の方法論[30]を援用した，比較図書館学の方法論を提唱し，次の四段階の方法的諸段階を踏むとしている。

（１）関連データの組織的収集と正確確な記述
（２）解釈（interpretation）：社会で一般に認められた手法によるデータの分析
（３）並置（juxtaposition）：比較の枠組を設定するために関連データを対比吟味
（４）比較（comparison）：原因，説明，結果の究明

また Krytz も四段階の方法論を提唱するなど[31]，Bereday の方法論は，比較図書館学の方法論の形成に大きな影響を与えた。

なお Bereday は「仮説の定立と検証」という手順を重視しており，同時期に比較教育の方法論を表した Noah & Eckstein も，最初に仮説を設定し，各種指標を用いて仮説を分析・検証することを主張した[32]。Danton や Krytz も，説明・原理の探究という点で仮説を重視し，最終段階で仮説が解明され，説明がなされなければならないとしており，比較図書館学は，比較教育学と同じ方法論に集約していった。

D　比較研究の類型

Colings は比較図書館学研究を，次の三類型に区分している[33]。

① 地域研究（area study）
　背景となる決定諸要因の文脈の中で，一国あるいは一地域（region）における図書館発達に関する記述的調査および批判的分析を行なうもの。

② 国民間もしくは文化圏間研究（cross-national or cross-cultural study）
　複数国における図書館の館種の研究（大学図書館研究など，または二国あるいはそれ以上（あるいは同国内の異なった状況下）における技術上の問題の研究。

③ 事例研究（case study）
　図書館学教育など，ある特定国における一館種あるいは図書館発達の主要因について深い分析を提供するもの。

なお Danton は，Collings らが一国を対象とした地域研究を比較研究の中に含めていることに対し，特定一国あるいは一文化圏における図書館発達に関する記述的調査および批判的分析などの研究は，「比較研究」に含むべきでないことを主張している[34]。本稿では，前述のとおり，時間比較にもとづく一国を対象とした

地域研究は「比較図書館学」に入るが，複数の国を対象としていないことから，「国際比較図書館学」には入らないとの立場に立つ。

E　日本における比較図書館学研究

竹内によれば，日本の図書館学研究・教育において「比較」という方法は戦前より採用されており，最初の研究は1939年の加藤宗厚『比較分類法概説』[35]である[36]。

しかし方法論の検討まで含めた本格的な研究の始まりは，第二次世界大戦後になってからである。1958年に岩猿が「図書館学における比較法について」[37]において，海外の比較法について紹介したのがその始まりである。杉本は1960年代から1970年代に欧米で発展した比較図書館学に関して方法論まで含めた詳細な紹介を行っている[38]。また竹内も，Krzys の比較図書館学の研究法を紹介している[39]。このように日本では海外での比較研究を紹介する論考が中心であり，独自のアプローチの提唱は行われていない。また比較図書館学の研究方法や定義などを論じる研究も，竹内を最後に行われていない。

一方で，比較図書館学にあたる研究は継続的に行われている。研究動向としては，一国の図書館史の時間比較や，複数の図書館の比較が大半である。「国際比較図書館学」による調査や研究は，最近では東京とホノルルの学校図書館の比較を行った Nakamura[40]や，アジア地域の LIS 教育の現状を比較した Miwa[41]があるが，非常に少ない。

3．比較による東南アジア地域の LIS 教育研究の動向

先に述べたように，比較図書館学は，アメリカから派遣された図書館コンサルタントの途上国での勤務経験をもとにした著書から始まり，その後欧米の図書館学校へ留学した，アジアやアフリカ出身学生による学位論文において，比較研究は行われるようになった。このように主たる書き手が変化していくことで，比較のテーマも変化している。

そこで本章では，戦後から現在までの東南アジア地域の LIS 教育研究に関する国際比較による先行研究を検討し，研究の主体者が時代と共に変化したことで，比較図書館学研究の動向にどのような変化が起きたのかについて考察する。

A　欧米コンサルタント[42]による途上国の図書館紹介

東南アジアの LIS 研究は，戦後の図書館復興や図書館開発のために欧米から送られた図書館コンサルタントによって始まった。1959年の *Library Trends* の特集「新興国の最新動向」では，アジア太平洋，アフリカ，中東，ラテンアメリカの各地域の図書館の動向が網羅されている。東南アジアの LIS 教育については，イギリスによる影響を検討した論文[43]と，アメリカによる影響を検討した論文[44]がそれぞれ対比する形で掲載されており，両国による東南アジアの LIS 教育への影響の違いが検討できる。

図書館コンサルタント出身者による単著には前述の Asheim の他，1969年の Kaser らによる *Library Development in Eight Asian Countries*[45]がある。この図書は独立後まもない東南アジアの 8 カ国の図書館を知る上で貴重な資料となっている。また1975年には，Wijasuriya らによる *The Barefoot Librarian*[46]が出版された。イギリス植民地時代から独立後のマレーシアやシンガポールを中心にした，東南アジア数カ国の図書館事情について書かれている。他にも Bonn[47]はアジアを含めた途上国の LIS 教育について，Chandler[48]は UNESCO の支援による途上国の図書館サービス開発についてまとめた。いずれも数カ国の途上国を対象としているが，図書館の現状報告書であり，比較による学術論文ではない。

1980年代に入ると，アジアなどへのアメリカの図書館援助をテーマとした学術研究も行われるようになってきた。1981年の Harold による “American library education and library development in Southeast Asia” [49]は，アメリカとアジアの図書館事情の比較を含む，東南アジアの図書館開発について書かれた最初の論文となった。また Kraske はアメリカによる図書の寄贈や，ALA による図書館援助について歴史的に研究しており，被援助国の違いについても比較している[50]。

B　留学生による研究

図書館援助の一環として，アジア諸国などからアメリカの図書館学校へ公費派遣の留学生が送られるようになると，比較図書館学研究はアメリカ人コンサルタントから留学生へと書き手が移った。また1970年代の比較図書館学の進展とともに，LIS 教育の比較研究は欧米の大学院の学位論文でもみられるようになってきていた[51]。

アメリカの大学院では東南アジア出身の学生による比較研究が行われ，博士論文としてまとめられてい

る。たとえば1978年には，フィリピン出身の Furbeyre が，比較による東南アジアの LIS 教育に関する初めての博士論文を提出，南カリフォルニア大学より学位を取得している[52]。タイ出身の Sangpichitara も翌年，タイの LIS 教育の変遷についての論文を書き，ミシガン大学から博士号を与えられている[53]。またマレーシア出身の Diljit は，フロリダ州立大学の博士論文において，質問紙調査による64カ国の学校図書館の国際比較研究を行っている[54]。

C 現地の図書館員による研究

東南アジアの図書館員による研究や調査は，1965年の東南アジア図書館員会議（Congress of Southeast Asian Librarians : CONSAL）の結成や，国際機関主催の国際会議が増え，研究や実践の発表の場が設けられたこともあり，1960年代半ば頃より急速に増えていった。特に1972年にフィリピンで開催された第２回 CONSAL では，東南アジア地域の LIS 教育が大会テーマとなっており，各国の LIS 教育に関する発表が行われ，議事録にまとめられた[55]。10年後にはフィリピンで UNESCO と IFLA 合同の国際会議が行われ，Bowden[56]がアジア地域の LIS 教育について包括的な発表をしている。しかしいずれも各国の LIS 教育の現状報告であり，比較研究ではない。

また UNESCO は ASEAN と共同で，東南アジアの図書館や LIS 教育に関する報告書 Introduction to ASEAN Librarianship シリーズを計３巻刊行している。第２巻では LIS 教育をテーマにしており，LIS 教育の歴史と1980年代中頃の現状が，各国の図書館員によって書かれている[57]。また2006年に始まったアジア太平洋図書館・情報教育国際会議（Asia-Pacific Confernce on Library & Information Education and Practice : A-LIEP）の議事録[58]も，東南アジアの図書館や LIS 教育の動向を知る上で貴重な資料である。

図書館員による東南アジアの LIS 教育に関する初めての専門書は，1985年に出版された *Issues in Southeast Asian Librarianship*[59]である。シンガポール国立図書館長を務めた Anuar[60]が編集し，東南アジアの図書館や LIS 教育に関する論文集であり，比較研究ではないが，各国の図書館の歴史や出版事情を知ることができる。

D 現地の研究者による研究

1980年代に入ると，欧米の図書館学校へ留学していたアジア出身者による研究が始まり，Khurshi[61]，Atan & Havard-Williams[62]，Chaudhry[63]らが東南アジアの LIS 教育の研究を行っている。しかしこれらの研究も現状報告をまとめたものであり，比較研究ではない。

1990年代に入り，シンガポールやマレーシアに LIS プログラムの博士課程が設けられ，東南アジアの近隣諸国でも研究が活発化するなど，LIS 教育の国際比較研究も広がりを見せる。たとえばオーストラリアの Rochester[64]は，アジア太平洋地域におけるライブラリアンの研修について，パキスタン出身の Majid[65]は，東南アジア地域での LIS 継続教育について，ニュージーランドの Domer[66]は，情報リテラシー教育の国際比較研究を行っている。

近年，ヨーロッパではグローバル化の影響による高等教育の国際化や，専門職の国境を越えた移動が加速する中で，欧州域内での LIS 教育の質の保証や相互認証制度の確立，域内共通の教育プログラム構築に向けた各国間での連携についての研究が始まっている。この動きを受けて東南アジアを含めたアジア太平洋地域でも，LIS 教育の国際化，国家間協力といったテーマでの研究が近年増えてきており，地域間や多国間比較研究，国際共同研究などが増加している。たとえば南アジア出身で現在は北米で教鞭をとる Abdullahi は欧州と北米の LIS 教育の比較研究等を行い，LIS 教育の国際化の問題について論じている[67]。他にも台湾の Lin[68]や，Lin & Wang[69]，シンガポール南洋工科大学の Chaudhry ら[70]によるアジア地域の LIS 教育の地域協力について研究が行われている。

また LIS 教育の共通のアクレディテーション制度の検討など，LIS 教育の国際比較研究を基盤に，国境を越えた共通の制度設計に向けた研究が行われていることも，東南アジア地域の国際比較研究の大きな特徴となっている[71]。

4．まとめ

当初，比較図書館学研究は，欧米人コンサルタントによる本国と派遣先との比較や，留学生が留学先の国と出身国との図書館事情を比較するなど，空間比較による２カ国以上の研究も相当数見られた。本稿では，２カ国以上を対象とする国際比較研究を中心に取り上げたが，実際のところ，LIS 教育に関する比較研究では，一国のみを対象とする地域研究のほうが圧倒的に多い。アジアの大学では，研究環境が十分に整備されておらず，特に人文科学系は資金や充実した資料などが不足している。多額の研究資金を必要とする国家間比較などは難しいため，一国内を対象とする「比

較」研究が発達したと推察できる。またこれまでみてきたように，国家同士の比較を行うこともなく，各国の現状を並列に書き連ねていくことが国際比較研究の大半を占めている。比較により差異を明らかにし，差異をもたらした要因を検討することで，図書館活動の国際理解をうながすという，国際比較研究を行う意義や重要性は，正確に継承されていない。

冒頭にも述べたように，近年 LIS 教育分野での国際協力，国際理解はますます重要になってきている。研究環境が充実している日本が拠点となり，アジア太平洋地域での国際比較研究を発展させ，国際的な LIS 教育・研究の発展に貢献してくことが，今こそ求められているのではないだろうか。筆者も日本人研究者の一人として，アジアの国際比較研究に貢献し，比較研究をさらに進化させていくことを，今後の研究・実践課題としていきたい。

（指導教員　根本　彰教授）

注

1）喜多村和之『現代の大学・高等教育―教育の制度と機能』玉川大学出版部，1999，p. 12

2）Yan, Q. L. Xiaojun, C. “International & Comparative Studies in Information and Library Science : A Focus of the United States and Asian Countries” Scarecrow Press, 2008

3）Edwards, E. “Free Town Libraries, Their Formation, Management, and History” Trubner, 1869 なお2010年には Cambridge University Press より新版として “Free Town Libraries, Their Formation, Management, and History in Britain, France, Germany, and America” が出版された。

4）竹内悊　1982　比較図書館学について―リチャード　クリスの考え方―　日本図書館学会研究委員会編『図書館学の研究方法』日外アソシエーツ，1982，p. 62

5）Munthe, Wilhelm. “American librarianship from a European Angle : an attempt at an evaluation of policies and activities” American Library Association, 1939

6）図書館コンサルタントについては次の研究がある。

Berninghausen, David K. 1969 The American library consultant overseas. International Library Review, 1, 1, 97−105.

Brewster, B. J. “American Overseas Library Technical Assistance, 1940−1970” Scarecrow Press, 1976

Donovan, D. G. 1972 Library development and the US. consultant overseas. Library Trends, 20, 3, Winter, 1972, 506−514.

Dyer, E. R. , Ward, P. L. 1982 The international role of library consultants. International Library Review, 14, 4, 379−390.

Parker, J. S. 1979 The overseas library consultant. Library Review, 28, 4, 214−225.

7）Asheim, L. E. “Librarianship in the Developing Countries” University of Illinois Press, 1966

8）Dane, C. 1954 The benefits of comparative librarianship. Australian Library Journal, 3, 89−91

9）Simsova, S. , MacKee, M. “A Handbook of Comparative Librarianship” Clive Bingley, 1970, p. 11

10）杉本冨士夫　1974　比較図書館学試論（1）：図書館学と比較研究の視点について　熊本短大論集　第50巻　p. 60

11）Danton, J. P. “The Dimensions of Comparative Librarianship” American Library Association, 1973

12）Coblans, H. “Librarianship and Documentation : An International Perspective” Deutsch, 1974

13）Foskett, D. J. “Reader in Comparative Librarianship” Information Handling Services, 1976

14）Harvey, John Frederick. “Comparative and International Library Science” Scarecrow Press, 1977

15）Simsova, Sylva. “A Primer of Comparative Librarianship” Bingley, 1982

MacKee, M. Sylva Simsova. “A Handbook of Comparative Librarianship” Bingley, 1983

16）杉本冨士夫　1975　比較図書館学試論（3）：その方法と課題について（下）　熊本短大論集　第50巻　p. 89

17）Shores, Louis. 1968 Why comparative librarianship?. Wilson Library Bulletin., 44, 4.

18）Collings, D. G. 1971 Comparative librarianship. “Encyclopedia of Library and Information Science 5” Marcel Dekker, pp. 492−493

19）A. llen, K., Lancour, H. “Encyclopedia of Library and Information Science 5” Marcel Dekker, 1971, p. 39

20）F. ヒルカー　河野重男・森隆夫訳『比較教育学』福村出版，1967，pp. 145−147

21）Danton，前掲書（1973），pp. 55−56

22）Parker, J. S. 1974 International librarianship a reconnaissance. Journal of Librarianship, 6, October, 221

23）Simsova, S. “A Primer of Comparative Librarianship” Bingley, 1982, p. 95

24）Kawatra, P. S. “Comparative and International Librarianship” Envoy Press, 1987, p. 33

25）今日の国際比較図書館学研究の第一人者である Leif Kajberg 博士によれば，「実際のところ両方の用語にほとんど差はない」ものであり，「どの語を使うかは研究者次第」ということであった。（2009年３月博士へのインタビュー）

26）Yan，前掲書（2008），p. xxx

27）Allen，前掲書（1971），p. 39

28）比較教育学の方法論の多くは図書館学に容易に応用できるため，比較図書館学に関心をもつ者は比較教育学の方法論に精通すべきと述べている。（Collings，前掲書（1971），p. 493）

29）Simsova, S. 1973 Problems of comparing the library services of different countries. Studies in Comparative Librarianship : Three Essays Presented for the Sevensma Proze 1971, Library Association, p. 79

30）Bereday によれば，比較教育学は「教育制度間の類似点や相違点の中から意義を見いだす」ことを目的とする学問領域であり，教育制度を比較する際の方法として、①記述（一国における教育情報の系統的収集およびその詳細な記述），②解釈（社会科学の手法を用いた分析、意味の解釈），③並置（資料を体系化し，比

較のための基本的な枠組み・カテゴリーを整理し、比較分析の仮説を導く)，④比較（選択した問題の同時比較を行い、定立した仮説を検証）の４つの段階を提唱している。(Bereday, G. Z. F. “Comparative Method in Education” Oxford & IBH Publishing, 1964)

31）①２つ以上の地域の図書館に関するデータの記述，②図書館の歴史的，政治的，経済的，社会的解釈，③比較の基準を設定した上で，記述と解釈とのデータを交織して並列し，比較し，一致と差異とを明らかにした上で，同時比較のための仮説を形成する，④仮説の証明のために両地域の図書館現象についての同時比較を行い，結論を導き出す。(竹内，前掲書（1982)，p. 74)

32）Noah & Eckstein は，①仮説の定立，②概念の明確化と指標の開発，③事例となる国の選定，④教育データの収集と加工，⑤仮説の検証，からなる５段階のプロセスを提唱している（Noah, H. J. , Max A. E. “Toward a Science of Comparative Education”Macmillan, 1969)

33）Collings，前掲書（1971)，p. 493

34）Danton，前掲書（1973)，pp. 55–56

35）加藤宗厚（1939)『比較分類法概説』文部省，1939年

36）竹内，前掲書（1982)，pp. 60–78

37）岩猿敏生（1958)「図書館学における比較法について」『京都図書館協会十周年記念論集』

なお岩猿は1972年にも再度，研究の必要性を提唱している。(岩猿敏生 1972 比較図書館学について 図書館界 第24巻 第２号 p. 43)

38）杉本，前掲書（1974)，pp. 45–63 杉本，前掲書（1975)，pp. 55–77 杉本冨士夫 1975 比較図書館学試論（２）：その方法と課題について（上） 熊本短大論集 第50巻 pp. 21–41

39）竹内，前掲書（1982)，p. 60

40）Nakamura, Y. 2008 Teachers’ perceptions of school libraries : comparisons from Tokyo and Honolulu. Yan, 前掲書（2008)，pp. 265–287

41）Miwa, M. 2006 Trends and issues in lis education in Asia. Journal of Education for Library and Information Science, 47, 3, pp. 167–180

42）図書館コンサルタントは個人だけでなく，次の４種類の組織から派遣されていた者も多く含まれていた。①様々な専門分野のコンサルタントを手がける大手企業，②図書館コンサルタントを専門とする中小企業，③パートタイム契約の個人，④専門職協会，地域や国などの図書館組織からの派遣（Webster, D. E. , John G. L. 1980 Effective use of library consultant. Library Trends, 28, 3, pp. 352–353)

43）Palmer, B. I. 1959 Education and training of librarians in the newly developing British Commonwealth countries. Library Trends, 8, 2, October, 229–242.

44）Lomrer, A. , William V. J. 1959 Education and training of librarians in Asia, the Near East, and Latin America. Library Trends, 8, 2, October, 243–277.

45）Kaser, D. , et al. “Library Development in Eight Asian Countries” Scarecrow Press, 1969

46）Wijasuriya, D. E. K. et al. “The Barefoot Librarian : Library Developments in Southeast Asia with Special Reference to Malaysia” Linnet Books, 1975

47）Bonn, G. S. “Library Education and Training in Developing Countries” East-West Center Press, 1966

48）Chandler, G. (ed.). “International Librarianship : Surveys of Recent Developments in Developing Countries and in Advanced Librarianship Submitted to the 1971 IFLA Pre-Session Seminar for Developing Countries Sponsored by Unesco, Liverpool City Libraries, August 24-September 1, 1971” Library Association, 1972

49）Harold, G. 1981 American library education and library development in South–east Asia. Khurshid, A. (ed.) “Library education across the boundaries of cultures : A festschrift to mark the Silver Jubilee Celebration of the Library Science Department”Library Science Department, University of Karachi

50）Kraske, G. E. “The American Library Association in the Emergence of U. S. Cultural Diplomacy, 1938–1949” Ph. D. dissertation, Columbia University, 1983

Kraske, G. E. “Missionaries of the Book” Greenwood Press, 1985

51）Patel, J. P. M. “A Comparative Study of Methods of Evaluating Library Education Students in U. K. and U. S. A” Ph. D. dissertation, University of Pittsburgh, 1977

52）Furbeyre, M. L. “Education for Librarianship in Southeast Asia : A Comparative Methodological Study” Ph. D. dissertation, University of Southern California, 1978

53）Sangpichitara, U. “The Development of the Modern Library and Library Education in Thailand” Ph. D. dissertation, University of Michigan, 1979

54）Diljit, S. “An International Comparative Study of School Libraries” Ph. D. dissertation, The Florida State University, 1993

55）Marina G. D., Namnama P. H. (eds.). “Education and Training for Librarianship in Southeast Asia, Papers &Proceedings of the Second Conference of Southeast Asian Librarians held at the University of the Philippines, Quezon City, December 10–14, 1973”University of the Philippines, 1975

56）Bowden, R. (ed.). “Library Education Programmes in Developing Countries with Special Reference to Asia : Proceedings of the Unesco Pre-IFLA Conference Seminar on Library Education Programmes in Developing Countries with special reference to Asia held at the Asian Institute of Tourism in the University of the Philippines, Quezon City, Manila, The Philippines, from 15 to 19 August 1980” University of the Philippines, 1982

57）Chavalit, M. (ed.). “Intorduction to ASEAN Librarianship : Library Education and Training” ASEAN Committee on Culture and Information, 1993

58）Khoo, C. Singh, D., Chaudhry, A. S. (eds.). “Proceedings of the Asia-Pacific Conference on Library & Information Education & Practice 2006 (A-LIEP 2006), Singapore, 3–6 April 2006” School of Communication & Information, Nanyang Technological University, 2006

59）Anuar, H. “Issues in Southeast Asian Librarianship : A Selection of Papers and Articles” Gower, 1985

60）Anuar は東南アジアの図書館研究を数多く発表しており，1958年から1988年の30年間で著書や論文は94本ある。(Loh, A. 1989 Bibliography : works by and about Hedwig Anuar, 1958–88. Gopinathan, S. , Barth, V. “The Need to Read : Essays in Honour of Hedwig Anuar. Singapore” Festival of Boooks Sinagpore, pp. 1–13. 宮原志津

子　2008 「はだしのライブラリアン」の足跡―ヘディッグ・アニュアールと東南アジア図書館界の発展　図書館文化史研究会編『図書館人物伝』日外アソシエーツ，pp. 343−354）

61）Khurshi, A. “Library Education across the Boundaries of Cultures” Ahmad Blocks Printers, 1981

62）Attan, H. B. , Havard-Williams, p. 1987 Library education in the ASEAN countries. International Library Review, 19, 2, 143−152.

63）Chaudhry, A. S. 1988 Information science curricula in graduate library schools in Asia. International Library Review, 20, 2, 185−202.

64）Rochester, M. K. 1992 Emergence of the Asian Pacific Area : implications for the education and training of librarians. IFLA Journal, 18, 43−50.

65）Majid, S. 2004 Continuing professional development activities in Southeast Asia. Journal of Education for Library and Information Science, 45, 1, Winter, 58−70.

66）Dorner, D. G., Gorman, G. E. 2006 Information literacy education in Asian developing countries : cultural factors affecting curriculum development and programme delivery. IFLA Journal, 32, 4, 281−293.

67）Abdullahi, I., Kajberg, L. 2004 A study of international issues in library and information science education : survey of LIS schools in Europe, the USA and Canada. New Library World, 105, 345−356.

Abdullahi, I. 2007 Diversity and intercultural issues in library and information science (LIS) education. New Library World, 108, 453−459.

Abdullahi, I., Kajberg, L., Virkus, S. 2007 Internationalization of LIS education in Europe and North America. New Library World, 108, 7−24.

68）Lin, C. 2004 The challenges and opportunities of regional cooperation in LIS education in east Asia. Paper presented at the World Library and Information Congress : 70 th IFLA General Conference and Council, 2004. http : //archive.ifla.org/IV/ifla70/papers/065e-Lin.pdf (accessed : 2010-9-22)

Lin, C. 2007 LIS development and challenge in East Asian countries of Taiwan, Korea, and Japan. Paper presented at the World Library and Information Congress : 73 th IFLA General Conference and Council. http : //archive.ifla.org/IV/ifla73/papers/083-Lin-en.pdf (accessed : 2010-9-22)

69）Lin, C., Wang, M. L. 2006 Regional LIS education cooperation in Asia, a continuing effort.,” Paper presented at the World Library and Information Congress : 73 rd IFLA General Conference and Council. http : //archive.ifla.org/IV/ifla72/papers/107-Lin_Wang-en.pdf (accessed : 2010-09-22)

70）Chaudhry, A. S. 2007 Collaboration in LIS education in Southeast Asia. New Library World, 108, 1/2, 25–31.

Chaudhry A S., Khoo C. 2008 Enhancing the quality of LIS education in Asia : organizing teaching materials for sharing and reuse. New Library World, 109, 7, 354–365.

71）Majid, S., et al. 2002 Accreditation of library and information studies programmes in Southeast Asia : A proposed model. Singapore Journal of Library and Information Management, 32, 58–69.

Khoo, C., et al. 2003 Developing an accreditation system for LIS professional education programmes in Southeast Asia. Malaysian Journal of Library & Information Science, 8, 2, 131−149.